

# 「相互行為における強調のはたらきの検討—応答におけるスタンス標識の使用を中心に—」研究経過報告<sup>1</sup>

増田 将 伸\*

## 要 旨

本研究では会話分析の手法を用いて、応答の冒頭付近で用いられる強調用法の日本語副詞「もう」を対象として、会話中のスタンス標識のはたらきの記述的検討を行った。インタビュー場面において質問が遂行している「興味深い内容を含んだ語りを要求する」という行為と、そこから生じる相互行為上の期待との関係から検討を行った結果、「質問の求める行為に答えられない」「質問の求める行為に十分答えられる」という両極端の場合のどちらでも、質問者の想定との隔たりを示すスタンスが表示されているという可能性が示唆された。

キーワード：会話分析、相互行為、スタンス表示、インタビュー、語りの要求

## 1. はじめに

注1に記した通り、本稿は増田(2018a)で残された研究課題に取り組んだものである。増田(2018a)では会話分析の手法を用いて、日本語副詞「もう」についてスタンス表示のはたらきの記述的検討を行った。質問に対して「もう」を発話冒頭付近に含む応答を対象とし、「質問が極性質問か疑問語質問か」「極性質問の場合、肯定的応答か否定的応答か」という2軸に沿って分類を行い、それらの分類ごとに「当事者性の主張」「話す意志または内容がないことの主張」「質問の前提への抵抗」というスタンスが表示されているという暫定的な結論を提示した。しかし、質問や応答の形式に沿った増田(2018a)の分類では、質問が遂行する行為とスタンス表示の関係が十分に記述できていない<sup>2</sup>。本研究では、質問が遂行する行為との関係から増田(2018a)での分析をとらえ直した。

## 2. 分析対象

分析対象としたデータは、『日本語話し言葉コーパス』中のインタビュー音声32例(二者対話、各10～15分程度)である。質問に対して「もう」を発話冒頭付近に含む応答23例について、会話分析の手法で分析を行った。「もう」には下記①～④のような用法があるが、①・②・④の用法だと明確に判断できる例は除き、字義的な意味が定めにくい③の強調用法を対象としている。

---

\* 京都産業大学共通教育推進機構

(1) 「もう」の用法（『日本国語大辞典』第2版より）

- ①時間的に経過して、すでにその状態になるさまを表わす語。
- ②限定した数量を示す語を伴って、ある状況をさらにそれだけ続けよう、または、ある数量にさらにそれだけ加えようとする気持を表わす語。
- ③間違いなくその状態であることを強めていう語。
- ④（あとに打消の語などを伴って）同じ事をこれ以上繰り返したくないという気持を強調する語。

「質問に対して「もう」を発話冒頭付近に含む応答」という分析対象設定の背景については増田（2018a）で述べている。ここでは、発話冒頭「付近」というのが、具体的には、「もう」より前に「いや」「そうですね」などの反応トークンや、質問の部分的反復が現れている発話の場合を指しているということだけ記しておく。

### 3. 分析

インタビュー会話での質問は、単に情報を要求する質問とは多分に性質を異にする。インタビューは「情報」ではなく「語り」を返す必要があり、しかもその語りは、聞き手（インタビュアー、およびインタビューを収録後に聞くコーパス利用者）にある程度興味深いと思わせる内容であることが期待されるであろう。とすると、インタビュー場面での質問は「興味深い内容を含んだ語りを要求する」という行為を遂行しているととらえられる。

(2) は、増田（2018a）に載せた断片（断片（8））を微修正し、1行目の前に背景情報を加えたものである。

(2) [D01M0019\_0703-0711]

((1行目以前の部分で、Rが狭く設備が充実していないアパートに住んでいたことが語られた。))

01 Y: °° .hh°° その : (0.2) 1年で出てくっ (て) . >

02 (0.4)

03 R: え [え .

04 Y: [そのあとはどういう \* : \* アパートに住んで [たんですか?]

05 → R: [そのあとは ] もう 六畳の .

06 (0.6)

07 Y: °ふ : ん ° =

08 R: = 普通の .

09 (0.2)

インタビュアーの Y は R が住んでいたアパートについて尋ねているが (4 行目)、それに対する R の応答は「六畳の」というものである (5 行目)。8 行目で「普通の」と付け加えられていることからわかるとおり、六畳一間のアパートはありふれており、とりたてて話題になるようなものではない。つまり、R は応答によってアパートについての情報を提供してはいるが、それを基に話題が展開するような内容は提供できていない。

インタビュー場面での質問が「興味深い内容を含んだ語りを要求する」ということを念頭に置いて、もう少し記述を精緻化してみよう。1～4 行目の R の質問は、「1 年で出てくっ (て).> (0.4) そのあとは」と、時系列に沿った形で構成されている。このことから、アパートの様子というよりもアパートに関わる経験を語ることを求めていることが窺える。また、断片 (1) の前の部分で語られていた、R が過去に住んでいたアパートは「玄関の半分が台所になって」おり、「料理する時は靴を履いて」するような奇妙なアパートであった。「1 年で出てくっ (て).>」というのはこのアパートを退去したことを指していると理解でき、その後に質問が続けられているので、Y の 1～4 行目の発話は、この奇妙なアパートの語りに連ねてその後の経験を語ることを求めるように構成されている。つまり、この質問は相手に少なからず「興味深い」ないし「奇妙な」内容を含む「経験の語り」を期待していると理解可能である。この質問に答えるべき位置でありふれた、経験と関係がなく話題にならないような内容を答えるということは、この質問によってインタビューを展開するというインタビュアーの計画にインタビュイーが応じられないことを意味する。このように、相互行為上の期待に応えられない際に「もう」が用いられている。

逆に、相互行為上の期待に十分応えられるという場合にも「もう」が用いられている。(3) は、増田 (2018a) に載せた断片 (断片 (6)) を微修正し、その後の部分も含めて掲載したものである。

(3) [D03F0036\_0322-0344]

01 X: .hh う [\* わ :::\* それ どう] なるんですか (.) 肉離れっ [て. ]

02 K: [.hh う : んちよっとね.] [(ch)]

03 → もう ぶり (.) って: [ゆったとた] ん.,

04 X: [.hhh ]

05 (0.4)

06 K: .hhh ↓もうう [ごけなくて :\*:\*]

07 X: [↑い :::: ↑た : い

08 (0.2)

09 K: 脚引|いたまんまもう :\*:\*.

10 (0.3)

11 K: ↓う : ん.

12 (0.4)

- 13 K: 病院行って: (.) テーピング止めして;
- 14 (0.2)
- 15 X: え (h) : [ : ((息混じりだが笑い声ではない))
- 16 K: [松葉杖突きますか; (.) って (h) 言 (h) わ (h) れて :.=
- 17 X: =°うわ :.= (無声)
- 18 K: => それはま :<
- 19 (0.5)
- 20 K: ね? (.) やめて :.=
- 21 X: =うわ :::

言語形式だけを見ると、「どうなるんですか」(1行目)という質問に対しては一言で答えることも可能であるが、(3)での質問は「肉離れ」という、頻繁には起こらないトラブルについてである。この場合、とりわけインタビューにおいては、痛みや生活上の苦勞など、ニュース価値の高い内容を応答者が語ることが期待できる。(3)でKは十分この期待に答えている。まず、肉離れした瞬間のことを「ぶり」という擬音語(3行目)を使って再現的に語っている。「～とたん」(3行目)という表現も切迫感を伝えるもので、Kの3～6行目の応答は、臨場感を備え、聞き手にとって興味深い内容となるように構成されている。また、6行目と9行目の発話は、その行で発話を終わらせることが可能な形式ではあるが、統語的には文を終止させる形式ではなく、発話の継続にも指向した構成になっている。Kの語りはこの後20行目まで継続し、インタビューでの応答として十分な長さを持つ語りになっている。増田(2018a)ではこの断片をKの当事者性と関連付けて論じたが、質問が遂行する行為との関連から分析し直すと、(2)とは対照的に、質問がなされた時点の相互行為上の期待に十分応えている際に「もう」が用いられていると指摘できる。

#### 4. まとめ

前節では典型的な2例のみを示したが、応答における「もう」の使用は、インタビューという場面において質問が遂行している「興味深い内容を含んだ語りを要求する」という行為と、そこから生じる相互行為上の期待との関係からとらえることができる。「もう」には想定される状況と実際の状況の間に隔たりがあることを強調するはたらきがあり(増田2013)、「質問の求める行為に応えられない」「質問の求める行為に十分応えられる」という両極端の場合のどちらでも「もう」が用いられていることは、質問者の通常の想定との隔たりを示す「もう」のスタンス表示としてとらえられる可能性がある。しかし結論を下すのは尚早で、事例分析やスタンス内容の記述をさらに精緻化する必要がある。

## トランスクリプション記号一覧

=	間を置かない発話順番の移行，または同一話者による発話の継続
[	発話の重なりの開始点
]	発話の重なりの終了点
:	音の引き延ばし (:が多いほど長い)
(数)	沈黙 (数は秒単位で長さを表す)
(.)	マイクロポーズ (0.2 秒未満の沈黙)
.h	吸気 (hが多いほど長い)
言 (h) 葉	呼気または笑いを含んで発話されている言葉
↑言葉	語頭の上昇音調
↓言葉	語頭の変音調
,	発話の継続音調
.	発話末尾の変音調
?	発話末尾の上昇音調 (疑問符ではない)
ˆ	発話末尾の上昇音調 (?より上昇幅が小さい)
> 言葉 <	速い言葉
< 言葉 >	ゆっくりした言葉
言葉	強勢が置かれた言葉
°言葉°	小さな声の言葉 (°が多いほど小さい)
* 言葉 *	しわがれ声の言葉
(言葉)	聞き取りが不確かな言葉
((言葉))	著者による注釈
→	分析の対象である行

## 参考文献

- 増田将伸 (2013) ターン冒頭部に「もう」を含む発話の相互行為上のはたらき—質問に対する応答の分析から—。社会言語科学会第 31 回大会発表論文集, 46-49.
- 増田将伸 (2018a) 「日本語会話のスタンス標識のはたらきの記述的検討」研究経過報告—副詞「もう」を例として—。総合学術研究所報, 13, 111-120. 京都産業大学.
- 増田将伸 (2018b) 応答発話冒頭付近での副詞「もう」の相互行為上のはたらき—質問への応答に現れる強調用法を中心に—。第 1 回会話分析研究発表会口頭発表.
- 増田将伸 (2018c) 強調の副詞を用いた応答によるスタンス表出—日本語の質問—応答中の副詞「もう」を例として—。京都ドイツ語学研究会第 97 回例会口頭発表.

## 注

- 1 本稿は増田 (2018a) で残された研究課題に取り組んだものであり、増田 (2018c) を基にしている。まだ研究途上ではあるが、京都産業大学総合学術研究所平成 30 年度特定課題研究 (準備研究支援) 「相互行為における強調のはたらきの検討—応答におけるスタンス標識の使用を中心に—」(研究代表者: 増田将伸) により得られた見通しの報告である。

- 2 この本質的な指摘は、増田（2018b）に対して聴衆からいただいたコメントによる。他にも本稿での議論は、ここでのコメントに多くを負っている。もちろん、本稿の不備は著者の責任である。

# Consideration on Emphasis in Interaction: Focusing on the Use of Stance Markers in Responses

Masanobu MASUDA

## Abstract

The present study has discussed stance marking in conversation through conversation analytic description on Japanese adverb *moo* used as an emphasis marker in the (near-)turn-initial position of responses. The discussion takes account of the action conveyed by questions in interviews, which is to solicit interesting telling, and of expectation in interaction derived from the action. It is suggested that the stance to display distance from the questioner's assumption is marked in both of the extreme situations when the respondent cannot align with the action conveyed by questions and when he or she can fully align.

**Keywords** : conversation analysis, interaction, stance marking, interview, solicitation of telling

